第一〇九回　東洋文化講座（二〇二二年一一月一六日）

兵馬俑と古代中国の歴史

鶴間和幸

こんばんは。オンラインの方もいらっしゃって、会場にも対面でいらっしゃいます。オンラインの関係でマイクなしで話しますので、少し大きな声でマスクも外しますので、なるべく前のほうは空けたほうがいいかもしれません。時間は一時間半ぐらいお話しさせていただきます。その後質疑があって、八時前には終わるという予定だそうです。

「兵馬俑と古代中国の歴史」です。展覧会は今年の三月から既に開催されて、四か所目が二二日から始まります。今回の主催は東京新聞と中日新聞、それから関西ですと関西テレビ、東京ですとフジテレビということで、これから宣伝します。私もフジテレビの深夜放送に出ました。

ここにポスターがありまして、それぞれの会場で作りますが、左側が京都展です。京都は関西圏の文化圏を持っていますので、予想以上に入りました。京セラの美術館で八万七、〇〇〇人ということで、みんなびっくりしています。

その次が静岡です。真ん中の下にあるのが静岡展。静岡の県立美術館ですが、六万二、〇〇〇人。静岡にしてはこれだけ集まったことに大変びっくりしました。

その後の黄色いポスターですが、名古屋の市博物館に移りまして、これは中日新聞の本拠ですから頑張って大体九万人が入りました。

今度は少し期間が長いのですが、一一月二二日から来年の二月五日まで、別に数は私はどうでもいいのですが、一

応新聞社のほうは目標を立てて、一五～一六万人と。ただ、コロナ期ですので、上野の森美術館は一日の入場者数を三、〇〇〇人弱にしています。

今日は展覧会の裏話を、先ほど荘君の話にありましたが、いろいろとさせてもらいます。展覧会は、「急がなくてもいいや、少し後から行こう」という人が多いので、だんだん数は上がっていきます。最後はどうなるのか分かりませんが、今の時期ですから予約制になっています。このポスターですが、それぞれデザイナーが違うのでセンスが出ていまして、東京展は紫を基調にしていますが、いい感じのものかなと。この日曜日から搬送が始まって、私も今日は上野の森美術館から来ましたが、これが今日もらってきた紹介のパンフレットです。

そんな感じで四か所目ですが、今年は日中国交回復五〇周年です。これからいろいろな話に入っていきますが、一九七二年に田中角栄首相が、全く国交がなかった中華人民共和国と国交を持とうということで北京に入りました。あれから五〇周年というその区切りで何かやらなければいけないという気持ちが私たちにはあって、二年ぐらい前から準備をしました。ただ、国と国の外交は、今は難しくなっていますが、でもこういう民間の文化交流というのは絶対に欠かしてはいけないので、そういう意味ではやってよかったかなと。

実は途中でいろいろな困難がありました。最初は去年の一二月に東京から始めるつもりでしたが、コロナの関係で東京は無理だろうということで最後に回しました。二月の春節の直前に西安がロックダウンになり、向こうの人たちは全く活動ができなくて、春節明けにみんなバタバタと。兵馬俑展はいろいろな世界で企画していますが、コロナ禍で唯一日本だけが残りました。ですから、中国側も大変頑張ってくれまして、何とか間に合わせようということでスタートしました。

東京新聞を取られている方は少ないと思いますが、私も関係しているので、一〇月から東京新聞を取り始めました。なかなか面白いです。いろいろな特集を書いています。例えば「兵馬俑と中国文明」というので真ん中に丸い感じの文字がありますが、見どころがそこに書いてあります。今日お話ししていくことが要約されています。

こういう形で東京新聞は盛り上げていますが、ただ、東京新聞だけだとどうも広まりません。いろいろなところからお誘いがあって、ＮＨＫの「日曜美術館」も取り上げてくれることになりました。一二月一八日の「アートシーン」です。これから取材を受けます。前回、二〇〇四年にやったときは産経新聞社でしたが、「新日曜美術館」で特集を組んでくれました。そんな形で広まっていくのかなと思います。

始皇帝の時代を扱っていますが、最初にこれを示したのは、始皇帝というのは二二〇〇年前の中国最初の帝王、皇帝ですが、その顔、姿は何も残していません。残していないところに意味があるわけです。中国の皇帝は姿を現さない。これは『史記』の中にも出てきます。皇帝が移動しても臣下に姿を見せない、ましてや民衆には見せないという、そこに権威を維持するということがありましたので、肖像を残さないのです。ですから、始皇帝はこうだという画像は、もうずっと後の明の時代の『三才図会』、これを私はよく使うのですが、これは全く根拠がない画像ですが、一応こういうものだと。

ただ一つ、私が時々言うのは、兵馬俑というのはモデルがあるわけです。馬も含めて八、〇〇〇体埋まっていると言われています。馬のモデルは分かりません。馬がどういう顔、個性があるのか分かりませんが、人間については一人一人違う顔ですから、モデルがあったと。その中の頂点にいるのは、今のところ一一体です。将軍俑と言われています。ただ、将軍といっても、後で時間があれば「キングダム」の話になりますが、いわゆる李信とか、蒙氏一族ですね、蒙驁、蒙武、蒙恬。そういう将軍はないです。それよりも下の高級軍人が将軍俑です。

将軍俑は今のところ一一体発見されていて、その中でもしかしたら始皇帝の顔に近いかなと私が思っているのがこの左にある将軍俑です。『史記』の中に始皇帝の顔が述べられているところがあります。切れ長の目で鼻が高く、クマタカのような胸だと。それしかありませんが、この一一体の中で一番近いかなということです。ですから、皇帝の姿はありませんが、不思議なことに、その臣下の姿は実にリアルに兵馬俑のおかげで残されているということが面白いところです。

こういう写真を私の本の「始皇帝の地下宮殿」の最後に載せたのですが、今日のテーマは、とにかく兵馬俑は等身大で造る、リアルに造るということです。左はまた別の中国国宝展で来た将軍俑で、顔はこちらのほうがいいかなという感じです。右側はロンドンのアシュモレアン博物館で、東洋の美術品も置いてあるので私も行きましたけれども、そのときにたまたま撮ったのがアウグストゥス、オクタヴィアヌスの像です。少し実物大より大きいです。学習院大学の島田誠先生に聞いたら、この指は何なのかというと、将軍が兵士に対して何か指図をしている格好だということです。

中国では、皇帝の姿はないけれども、かわりに将軍の姿はある。でもローマではまさに将軍であって、やがてオクタヴィアヌス、尊厳者になって、それがローマの皇帝制の始まりとされています。これも島田先生に聞きましたが、ローマでは皇帝、トップに立った者が市民と一緒に公衆浴

場に入って、皇帝の顔は知られているわけです。そしてコインには必ず皇帝の顔を表現します。これがローマの一つの文化です。

中国では絶対にそういうことをしない。でもこの将軍俑は姿をリアルに描く。これは何なのか。これから何度もお話ししますが、中国で唯一、始皇帝の兵馬俑だけが等身大でリアルです。その前の戦国時代も、次の漢の時代も、全くそれがありません。秦は二世皇帝、三代の子嬰で終わりますが、二世皇帝の墓も一応それと称するお墓がありますが、兵馬俑なんていうものは埋めていないでしょうから、始皇帝が唯一、等身大のリアルな俑を八、〇〇〇体も造って埋めたと。

これは結論的に言うと、始皇帝という一人の個性もありますが、プラス秦という始皇帝の帝国が置かれた時代の文化的な状況だと思います。これを後で三つに分けてお話ししますが、そういう歴史的な背景があって、始皇帝という存在と合わさって初めてこれが生まれたと私は解釈しています。今回はそれがテーマとなります。

漢の時代は兵馬俑がなく俑と比較しています。これは展示されていませんが、男性の俑が六三センチですから、三分の一の大きさです。ですから、始皇帝の等身大の文化は、漢は継承しなかったと言えます。

始皇帝のお墓は西安に、一辺が三五〇メートル四方の大きな墳丘が残されています。この地下宮殿はまだ掘られていませんので、地下宮殿に何があるのかは分かりませんが、この東一・五キロで一九七四年に兵馬俑が発見されました。その発見の歴史から入りたいと思います。

その場所は、東海大学の情報技術センターと学習院大学の東洋文化研究所が共同研究を行って、衛星画像から始皇帝陵の自然環境を探るということをやってきました。その画像をお借りしたのですが、秦嶺山脈の北側は東西に長い盆地です。関中、あるいは渭水という川の渭水盆地と言われています。秦というのは東西に長い盆地を拠点にしました。当初は宝鶏市の北側に雍城があって、そこに古い都があるのですが、最後は中心の咸陽に移りました。現在は近くに西安がありますが、これは漢の長安城、隋唐の長安城ですね。その場所です。

その東に驪山という山があって、その山の北麓に始皇帝陵が造られました。この関中平原は東に行きますと黄河が直角に曲がっていて、そこまで盆地です。さらに黄河が東に折れたところの南に函谷関という有名な関所があって、ここが秦の東の玄関です。こういう地形をまず押さえておきたいと思います。

東海大学にいろいろと画像を作ってもらいました。これは3Dで動く画像ですが、その南北は南が上にあって北が下ですが、驪山という山の、すごくせり上がった屏風のよ

うな谷と言いますか、急峻な斜面の真ん中に始皇帝陵が造られました。そこを選んだのだと思いますが、今日のテーマではないので省略します。その東に一・五キロ、兵馬俑坑と書いてありますが、そこが兵馬俑坑が偶然発見された場所です。

最初に発見の歴史をお話しします。兵馬俑坑は偶然発見されました。文化大革命が一九六六年から一九七六年で、その末期に当たる一九七四年です。西安は大変雨量が少ないところで、日本の三分の一ぐらいです。雨が降るのは夏の終わりから秋で、そうすると冬、春はほとんど雨が降らず乾燥しています。農業には灌漑が必要ですが、この年は格別春の干ばつが強かった。

この兵馬俑坑が発見された場所はそもそも地下に大きな空間があるわけですから、灌漑しようと思っても水はすぐに浸透してしまうし、この辺りは小麦の栽培ができなかった。ですから農民たちは、根を張って水を吸収できるような果樹園にしていました。特に西安は柿が特産で、柿の果樹園があります。ですが、灌漑をしなければいけないと、この年に井戸を掘りました。

結果として、五メートル掘れば兵馬俑坑の一番下まで行きますので、掘っていたら中から奇妙な陶器が出てきました。

これは今から振り返っても面白いのですが、三月二九日に最初の破片が発見されました。近くに臨潼県文化館、後に博物館になりましたが、そこに届けをしましたが、よく分からないわけです。文革中ですから、発掘されてもすぐにニュースにはなりませんでした。

六月に人民日報の内部報道、これは一般の人が読めない内部報道で、北京に伝わっていく。海外に伝わったのは一年後です。一九七五年七月に国営の新華社通信が、兵馬俑が発見されたと。ですから、一年間はよく分からなかったのです。一九七五年七月に試掘されて、二一六体の兵馬俑が発見されました。日本に伝わったのは七月一〇日です。後で新聞記事が見られます。

ということで、兵馬俑坑は破片が出てきて、何だかよく分からない時期が長かった。だんだんたくさん出てきて、ようやく一年後にこれが始皇帝の兵馬俑坑であることが分かるという、そんな歴史です。

これは東京新聞の一一月二二日の朝刊に記事が載りました。私が敬愛する袁仲一先生という兵馬俑の研究一筋の先生ですが、もともと江蘇省出身で、西安の西北大学の考古系を卒業して、最初は兵馬俑坑が発見されていないので陝西省考古研究所でいろいろな発掘をやっていましたが、これが出てきたものですから、陝西省考古研究所から独立しました。当初の兵馬俑博物館、今は博物院になりました。この袁仲一先生は私も大分前から存じ上げて、かわいがっ

てくれたのか分からないですが非常に優しい先生で、いろいろ勉強させていただきました。

東京新聞では北京の特派員が、コロナ期ですけれども、展覧会ですから西安まで飛びまして取材しました。当初は中日新聞に出ましたが、東京新聞はこの一一月二二日に出ました。そこに二枚の写真が載っていまして、袁仲一先生は八九歳で非常に元気だというこの記事を見て、最近、動向が分からなかったものですから、私は非常に安心しました。博物館の名誉館長です。発掘したときの写真が一枚載りました。これは若いときで四三歳のときです。今現在の談話では八九歳ということです。

特派員がこんな言葉を紹介しています。袁さんは一報を受け、「本当に興奮しました。ただ、等身大の大きさとは想像もしなかった」と。ですから袁先生自身も、今までこんなものはないですから、この陶俑というのが等身大だということにびっくりしたわけです。今日はその等身大の謎を解いていくというテーマです。

袁先生は地道にいろいろ整理するのですが、ただ発掘して修復するだけではなくて、そこに銘文があるということに非常に関心を持ちました。つまり制作者の名前が、全てではないですけれども、ありました。「銘文を調べ続け、官職や作者らの名前を割り出すなど、一つ一つの謎を解き明かしました。」という記事です。

一線を退いて久しい袁先生がしみじみと語った言葉が載っていました。「考古学を志す人間には土の中から見つかる物がすべて。やがて文化的な興味に突き動かされ、解明したくなるものです。」という日本語の訳を載せています。袁先生らしいです。本当に穏やかな先生で、淡々としていて、館長さんの時代にお会いしても全然偉ぶったところがなくて好々爺とした方でした。彼が土の中から見つかる物に文化的な興味を持って、それに動かされる、解明したくなると。兵馬俑が出てきたのですが、等身大でびっくりしたと。さらにそこにそれを造った人の名前があって、これを整理して集めました。どういう人たちがそれを造ったのかと、そういうところに関心を持ったわけです。

一年間かけてようやくこれが始皇帝のものだと分かったのは、この兵馬俑は陶器の焼き物ですけれども、その脇に青銅の本物の武器があります。袁先生は、その武器の中に銘文があるということを見ていきました。今回展示している、この五八というのは展示の番号です。

私、初めての方には自己紹介が遅れましたけれども、昨年三月で現役を退いて、学習院大学の定年を迎えましたので、専ら図録作りや展覧会の仕事に専念しています。現役だったら時間が取れなかったと思います。ですからこの図録は、数人に手伝っていただきましたけれども、ほぼ私が中心になって書きました。

その会場のキャプションです。「青銅戟」。青銅の戟というのは、木の部分が残されていなくて長柄があって、先に三角形の矛がついています。横に枝矛というのがついています。枝矛が左側に見えて、先に矛があります。これを合わせたものを戟と言います。枝矛の刃の逆の部分が長方形で突起しています。そこに銘文があります。右に拡大しています。

そこに袁先生は、三年の相邦呂不韋が造るという、これを見ました。三年というのは始皇帝の王の時代の三年です。当時はまだ年号制ではありませんので、「三年」だけでは誰か分かりません。呂不韋は秦に入って父親の荘襄王のときに丞相になりましたので荘襄王の可能性もありますが、荘襄王は三年半で終わりました。この年号は七年とか八年とか出てくるので、呂不韋が丞相で、三年以上の年号があれば、これは秦王政、始皇帝のことだということが分かった。この武器というのは国家が管理しますから、造った年代と、相邦、丞相の呂不韋が造ったのだと。最高責任者ですね。これが書いてあった。

この兵馬俑坑は始皇帝陵から一・五キロも離れていますから、当初は誰のものかと。この物を納めたのは陪葬坑と言います。陪葬坑の近くにはお墓があります。ですから、近くに誰か大物の墓があって、その陪葬坑だという意見もありましたが、これが出てきて、これは始皇帝のものだということが分かりました。なぜか始皇帝の、まだ王の時代の年号の武器が出てきています。兵馬俑を造ったのは皇帝になって、私は死後造ったと思っていますが、武器自体は古いものを入れたのでしょう。

そこに職人の名前がありました。寺工の讐、その役所の次官の丞の義、専らこれを鋳造で造った一番の職人の工の寫。振り仮名だけは書いておきました。これを見て袁先生が始皇帝のものだと確認したのは、これが出土したのは一九七六年ですが、一九七四年に井戸を掘って、一九七五年に報道してもまだ確定できなかったのですが、一九七六年にこういうものが出てきたので、始皇帝のものだということが分かったという歴史です。

今現在、四八年たってまだ掘っているというか、いつも掘っているわけではないですが、すぐに一号坑、二号坑、三号坑は保存して、ドームを造りました。これは一号坑ですが、現在、全部は掘っていなくて、密度からして面積から割り出すと全体の坑には約八、〇〇〇体が埋まっていると。とてつもない量です。等身大のものが八、〇〇〇体もあるというのはほかに例がないですし、等身大も例がありません。どのくらい発掘されたのか試しに数えてみたら、これも概数ですが、一、六〇〇体ぐらいが既に発掘されて整理されているということです。

先ほど言ったように、一九七五年に初めて報道されまし

た。一九七五年七月です。ですから、一年後になって初めて報道されました。当時は文革中ですから、日本の記者も西安に行くわけにいかないし、北京で情報を集めて、新華社のそれをそのまま翻訳して日本に送ったわけですが、大体の新聞は同じようなタイトルでした。地下から始皇帝のものだと。軍団が出てきたと。一九七五年にはもう始皇帝のものだと。一九七四年の出土でしたが、一年後には確定できているわけです。「等身大人形の兵や馬」というタイトルです。私自身、一九七五年七月に新聞を読んでびっくりしたかというと、あまり記憶がありません。記者が現地に行って紹介しているものではありませんので、こういうものが出てきたと。

七月一九日に写真が出ました。これもなぜか配信が新華社ではないのですが、写真が公開されました。ここに馬と兵士を整理したものが写真で紹介されて、こういうものが出てきたということになったわけです。これは一九七五年七月です。覚えておいてください。

二年後にこのものが日本に来たというのは、今では考えられません。二年後というのは一九七六年三月、だから一九七五年から二年もたっていないですね。報道して翌年です。発見されて二年後です。三月ですからちょうど二年。三つの兵馬俑です。兵士俑と馬の俑の三点が上野と京都で公開されました。これは兵馬俑展ではなくて、三点だけですから急遽、中国の古代の青銅器展の中に入れられました。

このときはなぜそんなに早く展示できたのかというと、田中角栄首相が北京に行ったのが一九七二年で、一九七八年に日中平和条約ができたので、条約の前です。だから中国も日本と条約を結びたいという、そういう時期ですから、お互いに、中国側のほうが強いと思いますが、新しく出てきたすごいものを早く日本で展示して、日本に見てもらおうと。中国からいうと、日本人民に見てもらおうと。今では考えられないですね。今は展覧会をやっても、新しく出てきたものをなかなか出してくれません。外には出さないと。ですから、展覧会には日中友好の時代があったわけです。今はもう終わりました。今は友好の時代ではなく、ある種、ビジネスの時代になりました。友好の時代の懐かしい話をしばらくしますけれども、これが一九七六年に来たということはすごいことだと思います。

私もこの青銅器展は行っています。図録にはありますが、私は去年退職して本を随分整理したので、すぐに見つかりませんでした。人から借りて、この三点の写真を今お見せしています。

本格的な兵馬俑展をやったのは一九八三年から一九八四年です。一九七四年に発見されたので、ちょうど一〇周年。今は四八年たったので、発掘一〇周年、二〇周年、三〇周年とやっています。今年は四八年ですから五〇年ではない

のですが、日中国交正常化の五〇周年ということでやりました。だからまた二年後に何かあるかもしれませんが、まだ動きは見えません。

このときは一九八三年から一九八四年、発見から一〇周年ということで、初めて本格的な兵馬俑展と名づける展覧会がありました。これはもちろん私も記憶があります。一九八三年に大阪から始まって、福岡、東京、静岡と。私は東京のオリエント博物館に行って、これを見ています。

見ているのですが、個人的なことを申し上げると、まだ秦の研究はしていません。中国へ一年行きましたので、その直前ですね。中国に一年行って、私は漢代史の研究をしていましたので、漢代史の現場の考古の遺跡をずっと歩こうと。漢の皇帝陵をずっと歩こうというときに、ついでに秦の遺跡も見ようというので、始皇帝陵や秦公大墓というお墓を見たり、鄭国渠という灌漑施設を見たりして、帰ってきてから、これは秦の歴史をきちんとやらなければいけないなと。出土史料も竹簡が睡虎地から発見されたので、それで秦をこれからやらなければいけないと。それでいろいろな調査を自分なりに組んでやり始めました。この展覧会のときはまだ「あ、そうか」という感じで見ていましたが、今振り返ってみると、実は重要な転機だったのかなと。

このときに兵馬俑を初めて日本に持ってきた方がいます。それは田辺昭三先生という、もう故人ですが日本の考古学の大御所で、須恵器の研究をしている方です。当時、京都埋蔵文化財研究所の調査部長です。この田辺先生がいて初めてできたのです。

中国の考古学者というのは日本の考古学者と交流が非常に密です。ですから、我々よりも日本の考古学の専門、田辺先生のほうが中国に顔が知られています。その田辺先生が日本で初めてやろうというので、これをやりました。田辺先生は静岡の出身なので、最後に静岡に行きました。

その図録がこれです。大変貴重な図録ですが、今は古本で結構安く、数百円で買えます。そこに田辺先生の文章と、実はその上に西嶋定生先生という私の大学院のときの先生の文章があって、今振り返ると、西嶋先生も「二十等爵制の研究」という漢代史中心に爵位の研究をやっていたのですが、講談社の「中国の歴史」や「岩波講座世界歴史」など、秦の皇帝権力について関心を持ち始めたのですね。皇帝とは何かという研究をやっていた頃にこの展覧会があったものですから、西嶋先生が「始皇帝とその時代」という文章を書いています。

今思うと、私はこの文章にすごく影響を受けました。始皇帝は五回にわたって巡行し、統一後、全国を回るのですが、その五回を整理した地図を西嶋先生が初めて載せました。少し修正しましたが、私もそれを大分使わせていただきました。ということで、西嶋先生は、皇帝権力に関心が

あったときにこの展覧会があったものですから、この図録に文章を寄せています。

二人とも故人になってしまいましたが、田辺先生はこの後の話につながります。田辺先生とのお付き合いは私が茨城大学にいるときに始まりました。茂木雅博先生という考古学の先生がいろいろな先生を呼んでいて、そのときに初めてお会いしてお付き合いが始まって、非常に気が合いました。一九三三年生まれで、私は一九五〇年生まれですから、兄弟の契りというのを酔っぱらって結んだ記憶があるのですが、この方もすごく気持ちのいい、私にとってずっとお付き合いできた先生です。

私は始皇帝の研究をして、茨城大学の紀要に随分論文を書いて、手紙を出したら返事が来ました。「秦始皇帝諸伝説の成立と史実」という抜き刷りを送ったら、そのお礼だと。年を取ったので今までのはがきをうちにある小さな裁断機で整理していたら、田辺先生のものが出てきました。たまたま田辺先生の話が出てきたので今日は紹介しているのですが、実はこの文章の中に、「一五年前の展覧会以来、ずるずると門外漢の私が引き込まれ、ここまで来てしまいました」と。会ったときに、自分は中国の古代史ではないけれども、こんな展覧会をやっていいのだろうかと。そういう非常に謙虚な方です。私はちょうど秦の研究を茨城大学で始めていましたので、抜き刷りを送って、それ以来、私のことも評価していただきました。

これからお話しする兵馬俑展というのはいつも事件が起こるのですが、このときも大きな事件が起きました。田辺先生はそれをうまく解決しました。一九九四年に事件が起きています。そのとき私は田辺先生に、「新年早々一七日には神戸でお会いできるのを楽しみにしています」と。一九九五年一月一七日に会う予定でした。つまり、兵馬俑展のシンポジウムをやると。ところが大地震が起きて、田辺先生とお会いできませんでした。田辺先生は京都にお住まいですので、電話をして、京都はどうでしたかと。そんなことを記憶しています。田辺先生のこのときの話から行きたいと思います。

一九八三年から始まって大阪城公園で展覧会があり、そのときに大きな事件が起きました。これは新聞の記事ですが、一九八三年、日本で最初の兵馬俑展、発掘一〇周年での事件で、武官俑が壊されました。大阪城公園で築城まつりという記念すべき年に、簡易的に展覧会場をつくりました。今では考えられませんが、会場に兵馬俑を並べて、すごい人たちが押し寄せたのです。その中の一人の男が兵馬俑を壊してしまいました。粉砕した感じです。私もそれは東京で聞いていました。オリエント博物館のほうは、後から聞いたら、きちんと一体一体ケースに入れて近づけないようにしたというのですが、大阪城公園では本当に目の前

に兵馬俑が並ぶという状況で、壊されてしまいました。

これにはいろいろなことが関係して、真ん中の記事では、当時の共産党総書記の胡耀邦総書記が大阪を訪ねる予定が入っていたと。会場に来てもらうけれども、壊されたわけですから何とか修復して、総書記の来訪に間に合わせようと。結果として間に合わなくて、その訪れた日の夜に修復が終わったのですが、そのときの談話は後で紹介します。

そのときの壊した人間が裁判にかけられて、一年後に判決があって、無罪判決に終わりました。兵馬俑破壊の方が心神喪失で無罪判決になったと。ここまでは知っているのですが、京都展のときに関西テレビのスタッフとこの話をしたら、先生、ぜひ番組をつくりましょうと。ユーチューブで今でも見られます。このユーチューブから画面を切り貼りしたのですが、まずは胡耀邦総書記の談話です。当時の大阪府事が、武官俑が破壊された事件をわびました。その前に中曽根首相も謝意を入れていますが、大阪府知事もわびました。総書記は、これは新聞の記事ですけれども、「さいなことで大同に影響ありません」と笑顔で答えたと。これはやはり日中友好の時代ですね。これは大変な事件は大変な事件だけど、大きな政治的問題にはしたくないという気持ちで、「大同」という言葉は当時よく言われましたね。小さい違いにこだわっていると友好なんてできないから、大きな気持ち、通ずる気持ちがあれば何でもできるという、そういう気持ちが表れています。

胡耀邦は一九八九年に亡くなっています。胡耀邦総書記が亡くなったときに、総書記を悼む学生や市民たちが天安門に集まって天安門事件が起きたという、そういう非常に学生や市民たちから愛された指導者でした。そういう大きな器量を示した談話は私も印象に残っています。今回いろいろ調べてみて、「あ、そうだったんだ」と思いました。

カンテレがいろいろと画像を持っていまして、それを切り貼りして、一つ面白いことをここで紹介します。一九八三年の大阪城博覧会の模様ですが、ここにたくさんの人たちが押し寄せて、もう本当に大行列です。全部で何万人入ったのか調べはつきませんでした。一九七四年に発見後、初来日したのは一九七六年ですが、一九八三年、一〇年たって当時の日本人がこれはすごいものが来たというので、大変多くの人が押し寄せました。

右側に挙げたのは、一九七二年に田中角栄首相が行った後、たしか一〇月に、日中友好で初来日しているものがあります。これがパンダです。リンリンとカンカンでしたか。パンダが、これも今は考えられないのですが、数か月置いて日本に来日しました。

そのことをテーマに家永真幸さんという方がパンダ外交という研究をしていまして、本格的な博士論文もありますが、パンダ外交で一冊本を書いて、これは二〇二二年一〇

月に出たばかりの本です。講談社メチエから出た「中国パンダ外交史」、これはすごく面白い本です。一九七二年に日本にパンダが来ましたけれども、これは戦前に遡って、場合によっては一九世紀に遡って、中華人民共和国以前にパンダというのは中国の外交に使われていたと。アメリカにも行きました。ヨーロッパにも行きました。パンダは贈呈するわけではなく貸出しです。子供が生まれたらどうするのか。ですから、このパンダをある種活用して世界との外交をやってきた。それをたどっていくと中国の外交史をたどれるということが書かれた本です。

その中の写真を拝借したのですが、これは読売新聞の写真で、当時、ジャイアントパンダの前にたくさんの日本人が押し寄せています。私は、パンダは中国では見たことがあるのですが、日本ではまだ見たことがありません。上野のパンダは今、入場制限がなくなって見られるそうです。とにかく一九七二年はこのパンダが来るということで、すごかったです。

家永さんは「パンダ外交」という言葉を使いましたが、僕も以前、「兵馬俑外交」という言葉を使ったことがあります。中国の兵馬俑博物館に行くと、海外に貸出しする兵馬俑が並んでいる倉庫があります。これは今、アメリカに行っている、これはどこそこに行っていると。将軍俑は今は一一体ですが、海外に貸し出す将軍俑は決まっています。中国にとってみれば本当に全世界です。ヨーロッパ、アフリカ、中南米。中国国内もずっと回っていますが、まさに兵馬俑は外交をやっている側面があるという面白いところがあります。友好の時代には本当に兵馬俑外交で、今はビジネスとして兵馬俑は全世界で展示されているという側面があります。

関西テレビは修復されたことを美談としてまとめました。私も見なかったような画像が出てきて、右下ですが、高さ一九二センチ、重さ一六〇キロの兵馬俑を押し倒して破壊したと。本当に粉々になっています。これは分かりにくいですが、胴体の中が見えますね。足のふくらはぎから中が見える。兵馬俑は空洞です。そうしないと焼けないし、うまく造れない。これは押し倒せば割れます。もともと土の中で破損した状態のものを復元して、修復したものが展示されているのですが、ここで粉々に壊されたと。

これはどうするのか。胡耀邦総書記が来る前に何とかしなければいけないというので、田辺先生が、当時の日本の考古学の修復技術は中国より上を行っていましたが、優秀な技術者を集めました。彼は京都市の埋蔵文化財研究所の調査部長ですから、そのリーダーシップを発揮しました。自分が持ってきた展覧会ですから。

これは修復が終わって日中の双方で握手をしているところですが、左から三人目が田辺昭三先生です。修復したも

のが真ん中に立っていると思います。中国側の専門家も、日中の国民の友情と文化交流は破壊されることは絶対にないということを言っています。本当に友好の時代ですから、こう言ってくれたわけです。

関西テレビのタイトルは、酔っ払いが倒したと。僕らも当時はそんな話を聞いていたなと思っていろいろと調べました。関西テレビはそれで行きましたが、邉見統君にいろいろとデータを集めてもらいました。新聞記事はもちろん、裁判の判決文まで今はネットで探せます。探してみたらどうも酔っ払いではなかったということです。

その中で一つ気になる言葉があるので紹介したいと思います。一年後の判決文の「被告人は病的な影響下」というのは、大阪城ですから、自分は秀吉の家臣の蜂須賀小六の直系の子孫だという思い込みです。妄想です。下見までして、そこに中国の人が造った魂のこもった兵馬俑などを展示するのはけしからんと。これを壊してやろうと思ったのでしょう。計画的に犯行に及んだと言っています。ただ、精神的な問題があったので無罪になったと。心神喪失です。

その中で気になったのは、細かいことはいいのですが、判決文で、高さ一・九二メートル、重量一六七キロ。兵馬俑は重いですね。ですから、展示するときにクレーンでつり上げて一体一体下ろしながらやっています。将軍俑は一番重くて二〇〇キロぐらいあります。これは一般の兵士俑ですから一六七キロです。これを「両手で力まかせに突き倒して破壊し、もって器物を損壊したものである」と。

その後に彼が思い込んだ話があるのですが、その中に、「そこに人形を造った人の魂が宿っている中国の武装した兵隊や馬の人形を展示することは豊臣秀吉や蜂須賀小六を侮辱し」という、そういう思い込みです。ですから、ここに造った人の魂を彼は感じたわけです。等身大でリアルというのは、そのモデルになった兵士の魂を私たちは感じているのですが、彼は造った人の魂ということで、ここを取って次の話につなげたいと思います。

先ほど袁先生が造った人の制作者の名前を集めているという話をしました。かつて七六人ぐらいの名前を発見されました。ダブって名前を刻んでいるのですが、スタンプで陶器が乾く前に押す場合と、乾いてから線刻で刻み込む場合がありますが、そこに名前を残しています。ただ、これは目立つところには残しません。兵馬俑自体地下に埋めますので人に見せるためのものではないのですが、別に名前を誇るわけでもないし、むしろ責任の所在を表しています。ですからなるべく見えないところ、例えば左に、これは損得の得という字で左右反転していますが、得の字をこれはスタンプで押したのでしょう。なぜか反転した字を彫っていますが、裾の下から上を見る感じで、あそこにスタンプで得という名前を彫っています。

真ん中は、兵馬俑は全部レンガの上に立たせていますから、レンガの上に宮という、これは線刻です。多分乾いてから彫ったのでしょう。宮というのは、宮の水と書いて、兵馬俑を造った工房の一つに宮水という国営の工場がありますが、ここの工場の頭文字をここに書きました。

右側は腕が見えますので、上着の横ですね。そこに咸陽の賜と書いています。咸陽というのは工房の略称です。咸陽宮の中に工房があって、その咸陽の工房の賜という、この賜は名前だと思います。

上には係という字が書いてあります。これも裾のところです。ズボンがちらっと見えますが、これはスタンプでしょうか。

こんな形で袁先生が彫るのですが、修復は修復士に任せて、こういう史料を丹念に集めて、そこでこの兵馬俑は一体誰がどういう目的で造ったのかという研究を総合的にやりました。

左側は兵馬俑坑を造った人々です。始皇帝陵を造った人々の墓があります。これは兵馬俑を造ったのではなく始皇帝陵を造った人々です。秦が統一したときに東方の国々があって、そこを征服しますね。そうすると東方の人たちが駆り出されます。普通の庶民もいますが、当時、秦では罪を犯した人々を労働させました。その人たちが亡くなったら集団墓地を造って、瓦に墓誌を作ります。その人の経歴を書いて葬るのです。それによって始皇帝陵を造った人の出身が分かる。秦が征服したところを東方と呼んでいますが、そこから来ていると。

余談ですが、以前、四大文明展をやったときに、エジプトと中国はすごく似ているので吉村作治先生と話になって、エジプトは建設労働に駆り出された人間が亡くなったらナイル川に捨てるよという話をしていました。これは対談をやったのですが、私はよほど口に出して、中国はもう少し文化的に高くて、きちんとお墓を造って墓誌まで入れますよということを言いかけたのですが、とどめました。半分冗談ですけれどもね。中国は幾ら刑人でも、一般の庶民も駆り出されていますから、彼らがここで亡くなった場合にはきちんとお墓を造って、粗末ですが、瓦に出身地などを書いて一緒に埋めるということはしっかりやりました。

兵馬俑の場合、その造ったものに名前を書くわけです。これは大体七六人いた棟梁です。いろいろ粘土をこねたり、色を塗ったりして分業していますので、多分棟梁の下には一〇人ぐらいいるだろうと。例えば七六人いるとしたら、七六〇人が八、〇〇〇体の兵馬俑を造りますから、一、〇〇〇人で造ったとしても一人八体造ればいいわけで、だから私は、兵馬俑は統一したときから一二年かけて、始皇帝が亡くなるまでのそんなに長いときをかけて造ったの

ではなくて、彼が亡くなってから造り始めても数か月でできるだろうと。中国にもこういう意見はあるのですが、そう思っています。袁先生は統一したときから一二年かけたという意見です。

私も最近、始皇帝の時代の名もなき人々というので、去年、秦漢史学会の講演で話をして文書をまとめましたが、これも資料にしました。中には田とか屈という名前が出てきますが、これは実は戦国の斉や楚の国の名族です。名族といっても、貴族でもいろいろな階層がいますが、この兵馬俑の制作に駆り出された中には少なくとも東方の斉とか、南の楚から来ている人たちがいるという証拠かなと。

秦というのはとてつもないものを造るのですが、秦の技術力、秦の人材だけで造ったわけではなく、秦が東方の人たちの技術や人材をうまくコーディネートして造ったと。だから東方の国ではやらないようなことを秦がアレンジした、それが兵馬俑であり、秦の残した考古資料だと考えていますので、兵馬俑を造ったのも東方の人たちが中心だったと思っています。

最近、こういうことを書きました。兵馬俑の制作者の魂は先ほどの壊した人の感想ですけれども、私はむしろ兵馬俑には、そこのモデルになった人の魂を感じています。その辺の話に行きます。

秦の咸陽城の周辺にはたくさんのお墓があります。戦国時代の秦の墓です。始皇帝に仕えた将軍とか高級官僚は始皇帝陵の西側にお墓が最近発掘されています。そこではなくて都の周辺にはたくさんのもっと小規模なお墓があります。秦の咸陽城は東方から統一したときに一二万の家の人間を移住させたとあります。一二万の家というのは、一家族五人として六〇万人の人間を東方から移住させたことになりますが、ただ、東方から来た人たち全てではなく、もちろん秦の人間もいるわけですが、都周辺にお墓を造ります。その中に幾つか、兵馬俑と関係あるものが確認できます。兵馬俑でモデルになった人々は死んだらどこに埋葬されていたのかというと、これは殉葬ではありませんので、一緒に殺されたわけではありません。彼らは自分の墓にしっかりと埋葬されている。始皇帝陵を造った人たちも集団墓地があるわけですから、その墓ではないかと。兵馬俑坑のモデルになった人たちの墓だと私は最近発言しました。

一つの例ですが、小さなお墓があって、左側に墓室があって、人骨が残されています。人骨が完全に残されるのは一つの例ですが、その腰のところに帯鉤という帯留があります。青銅で作った帯留。これが腰のところに残されていた。帯留というのは何かというと、兵馬俑には必ずと言っていいほどベルトがあって、そこに帯留が粘土で描かれています。これは帯鉤と言います。拡大しています。いろい

ろな形があります。ベルトに空けた穴のところに帯鉤の頭が引っかかるようになっています。ですから、兵馬俑の兵士たちは必ず、将軍であっても、皇帝であっても、帯鉤を持っていたと思います。こういう帯鉤が描かれています。

このお墓では本物の帯鉤が遺骸の腰のところにあるわけですから、当然これは埋葬されていたときに裸で埋葬されていたわけではなく、服を着ていたはずです。繊維質のものは腐ってしまいますので、金属の部分だけが残されている。ですから、この人間は帯鉤を持っているような人たち。これは兵士とは限らないです。兵士の例は次に挙げますが、兵馬俑の兵士に近い人間かなと思っています。

これはまさに兵士だと思います。秦の咸陽城の近くの塔児坡というお墓の中には遺骨があって、この遺骨の左側に長い棒があります。これはどの程度木が残っていたか分かりませんが、これは長い長柄の武器で、その上と下に青銅の部品があります。兵馬俑坑の例を右に挙げましたが、兵馬俑三号坑は儀仗隊がいます。ですから実践用の武器ではなく、頭の部分は殳（しゅ）と言います。地面につくほうは鐓と書いて鐓（たい）と言います。つまり、地面に長柄がつくわけですから、摩滅しないように金属をつけています。頭のところは、これは儀仗兵ですから殺傷用のものではなく、殳です。これは右側に図がありますが、正面から見ると三つに均等に斜めに分かれていて、これは展覧会で図録を書くときに、どうやって切ったのかなということで私はキュウリを切って、上から三等分に切るとどうなるのかなと。そうすると、この形ができます。これを殳と言います。

このお墓では殳と鐓が出土しています。その鐓の中に銘文があって、これはすごく大事な史料で、そこに「十九年大良造庶長鞅之造殳」と書いています。ここに鞅と出てきますが、これは「商鞅の変法」の商鞅の名前です。

実は商鞅というのは孝公のときに秦の改革をして、その後、商鞅の後に恵文王、武王、昭襄王、孝文王、荘襄王、それで始皇帝の時代ですが、孝公のときに大改革をやるわけです。東方から来た商鞅が、とにかくある種の軍事国家をつくるわけです。隣の魏に優位的に立ちたいというので、大家族をやめて小さい小家族にして、そこから軍人を出すという大改革をやって、商鞅の変法というものが二つあったわけです。第一次変法、二次変法と。その商鞅の名前が出てきます。

一九年、これはまさに商鞅の年代を表すわけです。商鞅の人間がここに埋葬されているわけではなく、実は始皇帝の時代にも度量衡の升に商鞅の升を使って、そこに始皇帝の統一したときの銘文が彫られているものがあります。ですから、商鞅のときに刻み込んだものをそのまま使い込んで、この兵士はお墓の中に持ち込んだのかなと推測してい

ます。ですから、まさに兵馬俑で、陶器で造られて、兵士が亡くなったときにお墓に丁寧に埋葬されて、関連するものをそこに埋蔵したと。そういう結びつきが考えられます。あまりこういうことを言う人はいませんけどね。

今度は兵馬俑展の歴史に入っていきます。今の話はまたつながっていきます。一九九四年、これは一九七四年から二〇年たっていますから、発掘二〇周年です。これは東京の世田谷美術館で展覧会をやりました。その当時はこれだけのものが来たのですが、発掘二〇周年の大型展示です。一九八三年、一九八四年、あれが一〇周年ですから、今度は二〇周年の展覧会で大型のものをやりました。

このとき私は茨城大学にいたのですが、展覧会の仕事ではなく、全国を回ってシンポジウムをやる、そのコーディネーターをやらせていただきました。それで展覧会に関わった話を少ししたいと思います。

ここでまた大きな事件が起きました。当時のパンフレットを出してきましたが、左は世田谷美術館の「秦の始皇帝とその時代展」というので、主催はＮＨＫでした。ですからＮＨＫが番組をつくり、この展覧会をやりました。

このときのＮＨＫの番組は、学習院大学でも講師をしていただいた井上隆史さんがすごく面白い現地取材をして、特に私も当時は巡行のことを調査してやっていまして、映像でも始皇帝が五回の巡行でどこを訪れたという現地の取材をやりました。私の研究とも重なっていますので、東京でやったときのシンポジウムに呼ばれました。「秦の始皇帝とその時代」というシンポジウムで、これは一九九四年九月一八日にやりました。右側に出席者で袁先生が出てきますが、このとき初めて私は袁仲一先生とお会いしました。もう故人ですが樋口隆康先生、それから私と早稲田大学の稲畑耕一郎さんと四人がシンポジウムに呼ばれて、これはＮＨＫの番組になり、このシンポジウム自体を放送してくれました。

この展覧会は各地を回るのですが、東京から名古屋に行きました。名古屋は一一月三〇日から翌年の一月一六日まで。一月一六日に名古屋展は終わるのですが、名古屋展のシンポジウムはこの開催中にやりましたので、名古屋に行きました。中国の先生を一人呼んで、日本からも専門の江村治樹先生を呼んで、私は真ん中でコーディネーターをやりました。そして次の会場でシンポジウムをやるというので、一九九五年一月一六日に神戸に入りました。神戸展が一月二五日から始まるのですが、展覧会が終わりますと撤収作業がありますから、時間がかかります。数日かかります。名古屋で撤収する前に神戸で大震災が起きました。私は前の日に入って、翌朝震災に遭って、一七日の五時四六分、四〇秒ぐらいの揺れで、気がついたら床に投げ出されていたという体験をしました。当然、物は行っていません

し、神戸展はキャンセルです。シンポジウムもキャンセルです。神戸展は中止になりました。

これはホテルオークラというところで、中国の先生を一人呼んで、避難したのですが、周りの写真を撮りました。神戸の南京町に兵馬俑の複製があって、これは誤解されるといけないので複製と書いておきましたが、複製の跪射俑と兵士俑がうつ伏せになって倒れているという情景を見て、大変だなと。

これは変な話ですが、神戸に兵馬俑が来なくてよかったというのは一つありますが、それよりも大変な大惨事でした。右下が私の部屋ですが、気がついたら床に投げ出されて、テレビも床に飛んでいました。これはメリケンパークですから、大正時代に造られた石造りの銀行が多いですが、爆撃に遭ったように崩壊していました。高速道路も倒れていました。

その惨事を見てこのときに感じたのは、私は歴史をやっていますが、古代の文明をやる中で、文明は非常にもろい中で人間がつくり上げてきたものなのだと。何か災害があると非常に弱い世界だと。

この一九九五年の体験で、二〇〇〇年に初めて展覧会の仕事を二つもらいました。一つは兵馬俑展で、一つは四大文明展というＮＨＫの仕事で、中国文明をそういう視点で振り返ってみたいと。その文明が置かれた環境ですね。非常に優れた文化を生み出すのですが、これは非常に特殊な都市で生まれ、それが非常にもろいと。戦争にももろいし、災害にももろい、その中の文明だという、そういう意識で展覧会をやりました。

その後、二〇〇〇年に東北地方を回った兵馬俑展をやりました。このときに、今日も関係している人が聞いているかもしれませんが、学習院大学に移ってからの展覧会で、かなり若手の大学院生を動員して、パワハラで訴えられてもいいような酷使をしました。みんなに図録作りに参加してもらいました。これは東北を回りましたが、山形が最初でしたかね。山形展が終わって、みんなで新幹線で帰ってきたのですが、そのときの解放感といいますか、大変記憶に残っています。要するに新幹線でお酒を飲んで、みんなが潰れてしまったと。

二〇〇四年に上野の森美術館で「大兵馬俑展」をやりました。これも大変面白かった。このときに随分感じました。中国の古代のものは若い人が関心を持ってくれないのかなと思ったら、意外と上野展では若い人たちが来てくれたと。このときに会場に来ていた高校生がその後、中国考古学をやったり、大学で中国史をやったりというのを個人的に知っていますが、そういう影響を持てたのかなという大変面白い展覧会でした。

その後すぐに江戸東京博物館で「彩色兵馬俑展」という、

色をつけることがどういうことなのかということをテーマにやったのですが、当時、こんな跪射俑が出土していました。二号坑から、非常に鮮やかな色が残っている。ですから、リアルだというのは、我々は土の色でリアルだと言っていますが、これは全部色がついていました。

会場にレプリカが二〇体あるのですが、フジテレビがそのうちの一体にプロジェクションマッピングで色をつけて、それで今、最後の作業をやっています。色をつけようと。そのときにこれが参考になりました。漆を塗って全身を黒にして、その上に鉱物の顔料、にかわで溶いたものを塗っていきます。手のところは白いですね。白ということは、それで終わるのではなくて、この効果を狙って、その上に肌色を重ねるわけです。顔のところは黒い漆が見えますが、肌色が見えて、唇が赤みを帯びています。瞳はちゃんと黒です。そういう色をつけたリアルさですから、これが八、〇〇〇体並んでいるのを見たら大変壮観というより、ぎょっとしますね。フジテレビのスタッフが、目を入れたらぎょろっとして怖いと。少し優しくしてと注文をつけました。ひげも真っ黒にすると怖いと。そういうことで、優しい兵馬俑になって会場の最後に立っていると思いますので、ぜひ楽しみにしてください。

将軍俑です。何といっても立派な体格で、一一体の中から一つ選んで今回展示しています。今回のテーマは、小さいものが大きくなって、また小さくなるということです。左下は展覧会場の最初にある戦国の秦の騎馬俑。これは小さな枠から出てきたのですが、あまりリアルではありません。顔も平凡な顔をしています。だからモデルがあったとは思われません。高さが二二センチという小さなもの。これが入り口の最初に出てきます。

これがなぜこんなに一九六センチになったのか。これは身長ではなく、冠のてっぺんまで。レンガの上に乗っていますから、レンガの厚みも含めて一九六センチです。ここに行くのですが、これはその後、続きません。漢の時代になると五〇センチ、六〇センチと小さくなります。騎兵俑もこういう感じです。これが非常に大きな謎です。今までも気がついていたのですが、それぞれの展覧会は別のテーマにしていたものですから、今回はこれを探ってみようと、ここに焦点を当てました。

実際に実物大のものを展示するのは大変なことです。静岡県美のとき、日通の美術専門の人たちだけが触れられました。中国からも添乗員が来て、損傷がないかチェックするのは中国の学芸員です。これは重くて一六〇キロから二〇〇キロですから、クレーンで下げて、そこに置いているわけです。右側が点検しているところです。弓を引いた兵士の像です。

この左側は騎兵俑です。高くなってしまうので馬の上に

載せるわけにはいかなくて、騎兵は馬の前に立たせています。右側が一般の軍吏俑です。

今回、なぜ大きくなったのかというのは、三つの要点を挙げました。一つは、秦というのは独特の文化を持っていたと。中国は戦国時代、最終的に七つの国が残りますが、最も西の国です。最も西ということは、中原からすれば、ある種、差別的に見られたわけです。ですから、戎（えびす）という言葉を使います。西の戎で西戎という言葉があります。西戎の文化だからこそ、こういう大きなものを造ったと私は考えました。

秦というのは馬を巧みに養って、それで勢力を持ちました。現地をいろいろ回りましたが、高原ですから今でも牧場があります。馬は軍事力の非常に大切なものですし、戦国期になると直接馬に乗る時代になります。周の根拠地の裏手にいたのですが、周のために馬を養って、その功績で秦という土地を与えられました。ですから馬を養うということは、秦というある種の勢力にとって、民族とは言い難いですが、大事なことです。

同時に、高原にいますから鹿狩り、虎狩りをします。今回の展示品でも鹿と虎をモチーフにしたものが展示されています。そういう中で育った秦人である、この系統をひく始皇帝は、丁寧に棺を焼いて造って、そこに鹿を埋葬しました。動物葬をやっていたのです。

中国の人たちは、動物であっても坑と言います。人間じゃないですから。陪葬坑というので、動物坑と言いますけれども、私は動物葬と言っていいと思います。ですから、鹿とか馬を埋葬している。その埋葬しているときに、彼らには愛着がありますから、その隣に馬飼人や動物の世話をしている役人の俑を造るのです。これが等身大の俑の始まりです。秦の文化が非常に大きな影響を持っていると。

やがて、本物の馬の七割程度の、等身大より少し小さいですが、そこに本物を埋めるのではなく、馬自体を焼いてしまおうと。これはすごいことですね。等身大の馬と、それに合った等身大の兵士、この組み合わせを兵馬俑坑で初めて実現しました。馬の存在を尊び、そこに人間を組み合わせて埋葬しようという秦の文化ですね。これは中原からすると、ある種素朴な西戎の文化だということです。

その中で、東方の中華からすると、非難されたことがあります。秦は殉葬をずっと行っていました。つまり、君主が亡くなると、君主の身近な人間たちに毒を飲ませて一緒に殺して、君主の墓に埋葬するのです。これは殉葬と言います。これは私が一九八五年に現地の秦公一号墓に行ったときの写真ですが、一〇年ぐらい掘ってようやく墓室の上までたどり着いて、翌年に掘ったら、このL字形の墓室が出てきました。その墓室の周りに全部で一六六人の木を組み合わせた殉葬の棺が確認できました。文献にはありませ

んが、秦の景公だと言われている秦公は、同時に一六六人の人間を殉葬したのです。文献を見ますと、それより前に武公は六六人、春秋の五覇に数えられている穆公は一七七人。ですから、君主が亡くなると一緒に殺されていったと。

東方の人たちもかつてやったのでしょうが、これを非難しました。特に孔子が非難します。「詩経」の中にも、国風の中に黄鳥の詩と。鳥の鳴き声の寂しさ、これは秦の名君であった穆公が優秀な臣下の子供たちを一緒に殺して埋めたことを悲しんだ歌です。この殉葬は東方の人たちからすると非難すべき対象です。戦国時代になって、秦の献公は東方との関係が強いので、都を櫟陽というところに移します。その献公は殉葬を同時にやめます。東方を意識していたのです。

今回、孔子のことを随分紹介したのですが、孔子にはこの殉葬と俑を批判する言葉があります。春秋末期の人間ですが、実は孔子の言葉はいろいろな文献にあって、「論語」だけに限りません。孔子の弟子たちが言葉を残していて、孟子が残している言葉に孔子の言葉があります。孟子は孟子で梁の恵王をいさめると。国はぜいたくで倉庫には穀物が満ち足りているのに、庶民はみんな野垂れ死にしていると。こんなことで政治はいいのですかと非常に猛烈に政治を批判します。

そのときに孔子の言葉を出してきます。孔子の言葉は何かというと、「始作俑者、其無後乎」。初めて俑という人間を写し取ったものを造った、これは木俑もあれば、陶器で造ったものもあれば、石もあるのですが、これを造り出した者は子孫がいなくなるよと。呪いの言葉です。非難したのです。孟子は説明して、なぜかというと、人をかたどって用いたからだと。つまり、人間をかたどって造ったことを孔子は批判したということを言っているのです。

これを四字の言葉で言うと「始作俑者」といって、初めて俑を造り出した者という言葉です。これは私、最初は知らなかったのですが、中国の記者さんのインタビューを受けたときに、「先生、現代中国語にありますよ」と。中国の人はみんな知っていると。我々は中国語を勉強しても、この言葉が今に生きていると思わなかったのですが、現代中国語を引きましたら、「始めて俑を作った人」というのが出てきました。これが元の意味です。孔子は批判していますが、それはものを創業した創業者の意味で使ったり、孔子が言っているように、悪い風紀をつくり出した人、そういう意味でも使うそうです。

今の中国の人たちはこの言葉をよく知っていて、孔子は人間の魂を写し取るようだと。説明を加えれば、魂を抜いてしまうわけですね。ロボットの時代に自分とうり二つのロボットがいて、動き出したら気持ち悪いですね。だから何か魂が抜かれるようだということを批判したのだと思い

ます。等身大とは言っていませんが、小さな俑であってもそういうことです。

この話はいろいろあって、学習院大学文学部の同僚だった兵藤裕己先生が「太平記」の訳をしていますが、その岩波文庫の「太平記」を頂いてぱらぱらと読みました。「太平記」というのは南北朝時代の戦記物語ですから、中国の戦争の話がたくさん出てきます。項羽と劉邦の話が出てきます。始皇帝が荊軻に暗殺される場面も出てきます。これは「平家物語」もそうです。中国の文献に基づいて書いているところもあるし、今は残っていない中国の文献の可能性もありますが、このページを見て私は大変びっくりしました。ここに始皇帝陵と俑が出てきます。

俑の話は、一九七四年に発見されましたが、実は一九六五年に漢の時代の俑が出てきます。展示されています。だから俑自体は今の考古学者も使っていたのですが、始皇帝の俑というのは一九七四年に初めてです。始皇帝陵と俑。

ところが一四世紀の「太平記」の中に、始皇帝陵と俑の話が一緒に書かれている。これにはびっくりしました。何でこんな話になっているのか。右側にメモ書きを書きました。項羽と、当時は「沛公」といった劉邦が、秦の都に入ります。いち早く劉邦が入ります。項羽は遅れて入った。こちらの軍勢が四〇万、劉邦は一〇万。ですから項羽を待つわけです。なかなか函谷関を突破できない。その前に秦との戦いがあったわけです。遅れて入ってきて、いわゆる鴻門の会をやりました。鴻門の会も実は始皇帝陵の北側の鴻門という場所でやりました。彼らは始皇帝を意識していたわけです。あそこに始皇帝が埋葬されていると。

二人がやったことは対象的です。劉邦は項羽が来るまで咸陽城を封印して、蕭何という臣下に秦の文書を全部保存させました。項羽は後で来て咸陽を焼き、始皇帝陵を暴き、そして三代目の子嬰を殺しました。その前に秦王子嬰は劉邦に下っているわけです。

そんなことが書かれているのですが、始皇帝が亡くなって人間の富貴を冥土まで送ったと。人間は「じんかん」と読みます。私も「人間・始皇帝」という本を書いて、中国語と韓国語に翻訳されたのですが、韓国語はよかったのです。人間というのはそのままの意味で、「いんがん」ですかね。中国語は人間というと別の意味があって、我々も漢文では「じんかん」と読ませていて、要するに世間のことを言うのです。だから人間ではないです。ですから、「人間・始皇帝」というのはそのまま翻訳できなかったので、別のタイトルをわざわざつけました。

ここではまさに漢文で「じんかん」です。要するに、始皇帝が生きていた時代の人間の富貴、これを冥土まで持っていったのだと。そこに長江と海をかたどって銀で百里に

わたる川や海をつくったと。これは「史記」にあります。その後、人魚の油で明かりを取った。これも「史記」にあります。

その次です。もう秦は殉葬をやめているのですが、生きた人間をお墓の中に入れちゃったという話です。三公以下の千官六千人、これは咸陽にいた官僚六、〇〇〇人を埋めたと。宮門護の兵一万人、これはまさに兵馬俑です。ここでは生きた人間を埋めたと。後宮の美人三千人、これは始皇帝陵の東北にもそういう女性のお墓があるのですが、ここでは後宮の美人三千人を生き埋めにしたという話です。楽府の妓女三百人、これは音楽にたけていた三〇〇人。皆生きながら神陵、これは始皇帝陵のことですが、神陵の土に埋もれて苔の下にぞ朽ちにける。ですから、彼らは埋められたのです。

その後、非難する言葉として、「初めて俑を作れる人は、後無からんか」と文宣王の誡めも、今こそ思い知られたれ。この文宣王というのは、この文献の時代を判定する決め手になるかなと。つまり、唐の時代の玄宗皇帝が初めて孔子に王号を追贈します。だから文宣王は唐以前にはなかったのです。だからこれは孔子のことです。兵藤先生の注釈がありますが、「孟子」にある孔子の言葉をここで引用していると。

そういうことですが、謎は、ここで俑と始皇帝陵が一緒になっている。これは「太平記」を作った人たちが創作したのかというと、恐らく中国にある文献を持ってきて、これをこの中に入れたのだと思います。ところが中国にまだ見当たらないですね。始皇帝という人間は、中国では評価されたり、暴君として非難されたりしますので、悪い言葉もたくさん書かれています。だから始皇帝陵を暴いたとか、中から物を運び出して中が火災になって三か月も燃え続けたとか、大げさな話がたくさんあります。

これも恐らく始皇帝をおとしめる伝説があって、始皇帝陵には生き埋めにした人たちがたくさん埋まっているということが何かの文献にあったのでしょう。そういう話は、日本は遣隋使、遣唐使が中国から文献をたくさん運んできましたから、既に中国にもないし日本にも残されていない、その文献に基づいてこのストーリーが出てきたのではないかと思っています。関心のある人はぜひ調べてほしい面白いテーマです。ですから、びっくりしました。もう既に俑と始皇帝陵が一緒になっている記事があったと。

先ほど言いましたが、トップには小さなかわいらしい俑が展示されています。顔を見てもモデルがいたとは思われないようなものです。でも大事なのは胡服という馬に乗る服装、それは筒袖で、前に乗りますから帽子をかぶっています。ズボンをはいています。そういう服装がしっかり描かれているところは大変面白いです。

西の戎と言いましたが、展示品で、軒瓦の瓦当という瓦にいろいろな画像を描くのですが、秦の場合には動物を描くことが多いです。展示されている中には鹿が描かれています。鹿紋瓦当という鹿です。鹿の瓦当を幾つか図録には載せましたが、狩猟をしなければいけないので、鹿の生態を非常によく知っています。鹿というのは集団で移動します。待ち構えて、その集団が移動するところを知って、それで鹿を弓で捕らえるわけです。そういう鹿の角の生え方とか、雌の鹿には角がないとか、角が毎年生え変わって年齢に応じた枝分かれが毎年のように出てくるとか、あとは小鹿が描かれたり、そういうことをよく見ています。この図象のタッチもすごくいいタッチです。

高原には虎もいました。虎狩りをしていました。最近の出土史料に、秦が占領した東方の地の南陽というところに虎がまだ生息していて、虎を一頭捕えたら千銭の褒美を与えるという、そんな法令が出されていました。

展示品で金虎という非常にかわいらしい、虎をモチーフにしたものがあります。時間の関係で省きます。

兵馬俑はまさにリアルで、一一体。これほど顔にこだわっている人はあまりいないので、中国の展覧会をやるときも、先生、どれでもいいじゃないかと。向こうから勝手に送られてきて、日本ではたびたび同じものが来ているので、みんなチェックしたのですが、今回は上の段の二つ目で、まだ日本に来たことがない初来日というものを選びました。これが今回の将軍俑です。これも省きます。

将軍俑ですが、この右側です。兵馬俑は一〇点ちょっとしか出してくれません。今までの展覧会もそうです。かつては同じところに複製品を置いてはいけないと言われたのですが、今は背景に複製品を置いてもいいということになりました。だから二〇体を並べています。二〇〇〇年前の陶器で焼いたものは水分が抜け切っています。将軍俑は一九〇から二〇〇キロぐらいありますが、右側のものは複製品で、あまり隅々まで手をかけていないですから、例えば一番右側も将軍俑ですが、顔は全くモデルになった将軍の顔ではない。今回は手を垂らしていますが、手を組んだときに、人差し指を立てます。腕のところの筋肉質も非常に見事に描かれている。頭のてっぺんから爪先まで本当に手を抜かない造り方です。今のものはまだ水分がありますから、色合いが全く違います。

これが成立した仮説ですが、先ほど言ったように、当初は実際の馬を埋葬したところに、馬飼人やその動物の世話をする役人を添えるというので、今回展示されているものに跪座俑というのがあります。正座をしています。跪座俑は高さ六四センチで、見た感じ、等身大よりも少し小さいです。私も座って同じ格好をして測ってみたら、私は一〇七センチぐらいありますが、大体七割ぐらいの大きさ

です。これは本物の馬や本物の鹿の横に添えるわけですから、少し控えめに造ったので、等身大になりかけているものです。

中には、この中に馬を埋葬した、中国では馬厩坑と言いますが、私は馬葬だと思うのですが、そこに等身大の一八〇センチの馬飼人の俑が登場します。ここで等身大になります。

中には珍禽異獣坑というので、非常にいろいろな動物たちに、わざわざ棺を造って、隣に穴を掘って、世話人の俑を納めたと。

これが等身大同士で結びついたのは兵馬俑が初めてです。等身大の馬と等身大の、この場合は騎兵です。これはここだけにしか例がない。陶器で造ったものが実際のものの代替です。馬も殺せない、兵士も殺せないわけですから。

今回、馬が展示されています。先ほどからイラストを入れていますが、今日、台湾から見ていると思いますが、荒見愛さんがこれから出てくるイラストを描いてくれました。後で名前を出してありますが、イラストが何枚か出てきます。

戦車馬という展示されている馬。それから、展示されている銅車馬。これは二分の一の大きさですが、比較の意味で大きくしています。展示されていませんが、馬に直接乗る騎馬。騎馬と戦車馬は同じ馬ですが、銅車馬という皇帝を乗せて走った馬は足が短く、牽引力のあるものかなと。少し違いますね。

これは戦車馬です。これを造るのは秦の発想じゃないと生まれなかったということだと思います。

会場で漢の時代の馬を展示しています。これは国宝です。武帝の時代には中央アジアの馬が入ってきます。大苑の馬が入ってきます。先ほどの馬に加えて、より速く、より遠くまで走れる中央アジアの馬が入ります。馬というのはどんどん改良されます。今回、蘭州大学で教鞭をとっている菊地大樹さんが馬の骨のＤＮＡ鑑定をして馬の系統を調べていますが、秦の馬も決して閉鎖的な馬ではなく、絶えず秦は西に位置しますから、優秀な馬を取り寄せて改良しているのです。それも変わってきています。漢の時代になると今度は中央アジアから直接入れますから、こういう馬が入ってきています。これは武帝が手に入れる前に、姉の死に際して送ったものです。実際の馬よりも尻尾の位置が高くて、耳と耳の間に角があります。大苑の馬はこういうものだという想像で造ったのだろうと思います。

銅車馬、これは複製品ですが、展示されています。銅車馬も二分の一の大きさで、始皇帝が亡くなったときに、始皇帝を弔うためにわざわざ木の椁室という、埋葬するかのような箱に入れて地下に埋めました。地下八メートルですから、木で造った箱は腐ってしまうので、この薄く造った

車体のところは破損されていますから、一〇年ぐらいかけて復元しました。これは国宝ですので海外にはまだ出たことがありません。いつも複製品を展示しています。毎回組み立てるのに半日以上かかります。

これは組み立てる前の部品です。

これは組み立てた後です。この話は省略します。

会場で、どういう形で馬を牽引しているのかというのを見てほしいと思います。手綱と引き綱がどう組み合わさっているのか、よく分かります。文献でしか分からなかったようなことが、これを見て、古代の馬車はどういうふうに動くのかということが分かります。

これは展示されていませんが、リアル性でいえば、これも最高のものです。水鳥坑という、水鳥の地上にある世界を地下に再現して、そこに本当に等身大の、青銅で鶴や白鳥やマガンを造って埋めるわけです。本当に見事な青銅の製品です。

二番目は西戎の文化ではなくて、西方の文化の影響があるという話をしたいと思います。これはまだ展示品ではほとんどないので私の仮説です。最近こういうことを言う人は数人出てきています。秦の始皇帝の曽祖父は昭王、昭襄王です。この時代はマケドニアのアレキサンダー大王が西北インドまで進軍して、人間の姿をリアルに造るギリシャ文化を西北インドまで伝えています。そこからガンダーラ美術が生まれたわけです。それが中国まで伝わったという証拠はありませんが、戦国時代の秦の墓から、どうもギリシャと関係のある文化が確認できる、そういうものが出てきています。そういう話をしたいと思います。

真ん中にあるのが西安の戦国時代の秦の墓から出てきた、身につける装飾の基になった原版の粘土です。これに型を作って金属を流し込むわけです。そういうものが入れられた秦の墓があります。

この二人の人物、これに非常によく似たものがアフガニスタンから出てきて、そちらはギリシャ神話に出てくるディオニソスとアリアドネスという二人の男女を描いたものです。中国側は、これは母と息子だと。母が息子を抱いている場面。ところが左のギリシャ神話の素材の彫刻は東博にもありまして、ディオニソスが女性を膝の上に載せていると。これも荒見さんに描いてもらいました。ここに「イラスト・荒見愛」と書いてあります。見ているでしょうね。

イラストで描いてじっくり見たほうがよく分かります。左側は装飾板で、右側がディオニソスとアリアドネスです。これを二つ並べてもらいました。右の人物が左の人物に腕を回しているわけです。最初私は、アフガニスタンで出てきたものは右がディオニソスで左がアリアドネスかと思ったら、そうではなくて、この左の人物が盃を持って、ブーツを履いている。そこに女性が肩を寄せている。これが同

じスタイルですね。中国のものも、中国的な服ではなく、ひだのついたスカート状のものをはいていますし、ここに冠のようなもので耳から垂れ下がっていますが、実はこれはカールした髪です。ギリシャ系の人間のカールした髪です。

ディオニソスというのは、右の図でいうと左側です。カールしていますね。これはギリシャ神話のオリンポスの一二神の一人ですが、ブドウ酒の神様で、ブドウ酒はコーカサス地方原産だと言われていて、それは中国にも伝わりました。ギリシャにも伝わった。ブドウ酒を栽培して、だんだん西にも伝わって、東にも伝わるのですが、その進行とギリシャ神話とが結びついてディオニソスという神が生まれて、ですから彼はブドウ酒の神様で、酔っ払いですね。ですから、ディオニソスの画像にはシネロスという酔っ払いがいる。右側の図の左下に酔っぱらって倒れ込んでいる男がいますが、そういうギリシャ神話です。

これが中国に入ってきているということは中国の人もまだ気がついていない。中国の人たちは母親が息子を抱いているという解説をしました。これは二〇一五年に東博に来ましたが、そこでの中国の解釈でした。だから私の新しい解釈は定着させたいと思っています。

そういう西から来た文化が少しずつ確認されてきて、始皇帝陵の西側の大型の陪葬墓から二体の金銀の駱駝俑が出てきました。この大きさはまだ発掘報告書が出ていませんが、小さいものだと思います。ラクダも荒見さんに見事なイラストを描いてもらいました。後ろ足のところに焼き印が押されています。この焼き印が気になったのでいろいろ調べてもらったら、今の中国でも寧夏回族自治区ではラクダの放牧をしていて、放牧すると牧場主同士のラクダが交錯しますから、焼き印をするそうです。これは秦の時代の焼き印です。始皇帝に仕えた高級官僚が誰か分かりませんが、そのラクダに描かれているということは明らかに西からラクダが献上されたと。当然、皇帝にも献上されたのでしょうが、その高級官僚のところもその俑を造ったということが言われます。

こういうことを探っていくといろいろなものが出てきます。かつて阿房宮から玉杯というものが出てきています。台座のついたグラスです。これはアフガニスタンからも出てきています。台座のついたグラスというのはローマングラスといって、ブドウ酒を飲むためのグラスですね。いろいろ議論があって、当時はまだ一九七六年ですから、どういう遺跡かというのはよく分かりませんが、少なくとも阿房宮の遺跡から出てきたと。これが秦のものだとすると、右下にあるのは湖北省の睡虎地から出てきた伝統的な耳杯という醸造酒を入れる耳のついた盃です。これは南方の盃で、北にも伝わりました。秦には一方で西から伝わった文

化の盃が入ってきている。漢書の大宛列伝を見ますと、中央アジアの国がみんなブドウを作っている話があって、ブドウ酒を作っている話が載っていますので、恐らく秦の時代にそういうブドウ酒の文化も入ってきているのではないか。

右上に珍しい、北方の秦墓では三耳杯という、これは中国の人は三人で乾杯する盃だという説明。三人というのは、ある紛争があったときに調停者と三人で最後に盃をするという説明があるのですが、よく分かりません。こんな不思議な盃があって、南方の盃とは違いますね。

最近、百戯俑坑で非常に特殊なものが出てきました。右側が普通の力士俑です。ところが二〇一九年辺りに行ったときに、左側の椅子に座っている力士が展示されていました。椅子ではないですが、支えるために椅子を造ったのです。私がいつも説明しているのは、秦漢の時代に椅子はないと。つまり、椅子に座る文化がないので、床に正座していた文化だと。でもここに椅子のようなものに座っている格好のものが出てきた。これを私はこういう説明をしています。つまり、百戯俑というのは西から来た、恐らくいろいろな妙技をするサーカスの集団であると。つい最近修復して出てきたのは、中国人はヨガ俑だというのですが、あおむけになってこういう仕草をしている。これは頭と足が逆ですけれども。おなかを上に向けてこういう格好をしている、中国の伝統的な、体操ではない姿が出てきています。やはり西の文化かなと。

これは大人（たいじん）です。大きな足。これは当初、二メートル一〇センチもあるような大きな人物だという報告もあったのですが、大人というのは、秦が統一したときに東方の武器を全部回収して大きな金人を造って、高さが一〇メートル以上あるような、そういうものを一二体造ったという伝説があります。東方の夷狄が服属して、大人が服属してきたという話、どうも西方には大きな人がいるという神話があるようです。

最後の三番目のこれだけお話しして終わりたいと思います。展覧会をやっていると、私も何回も会場で兵馬俑を見ているので、いろいろ考えが深まってきます。一点、二点はいいのですが三点目、兵馬俑はいつ誰がどういうことで入れたのかということはあまり議論されていません。いつ造ったのかは議論があって、さっき言ったように統一したときか、死んですぐか。では誰の発想なのかということで、最近思い切ってこんな発言をしました。つまり、始皇帝自身の遺志だと。始皇帝は一三歳で即位して、司馬遷は誤解して、翌年から始皇帝陵の建設を始めたと。これは漢代がそうですね。全員ではないですけれども。即位したらすぐに翌年改元して元年ですから、陵墓を造る。いつ死ぬか分かりませんから、制度として造るのです。

始皇帝も即位して、翌年から三七年間即位しますから、それだけかけたのだと「史記」では述べています。実は最近、新しい史料が出てきて、二九歳、始皇一六年のときに「史記」では陵邑をつくると書いてあります。始皇帝陵を守る都市をつくると書いてありますが、私は以前から、即位して造り始めたのに何で都市をこんなときにつくるのかなと思っていたのですが、最近出てきた漢の時代の年代記に秦の歴史が書かれていて、そこに始皇一六年に麗邑という陵邑の都市と酈山という始皇帝陵を同時に造ったと書いてあります。これで納得がいきました。

一三歳で造ろうという発想は、多分戦国時代にはなかった。つまり、二九歳はまだ戦争していますが、かなり東方の魏とか趙に対して優位に立ち始めたときに、自分の墓をきちんと造るべきかと。いつ亡くなるか分からないので。ですから、墓を造って、同時にそれを守るための都市をつくるということを二九歳のときにやって、五〇で亡くなったときに、何を自分のところに埋葬するか、遺言を出したと思います。これは遺詔と言います。これが最近出土した漢代の年代記で、ここで初めて始皇一六年に都市と墳丘をつくるということが出てきました。

ここで終わりますが、始皇帝の遺詔というのは謎です。司馬遷の『史記』だと砂丘で亡くなりますから、そこで始皇帝が遺言を出したと。『史記』に残っているのは、自分の後は将軍の蒙恬に託す。それから、長男がいます。扶蘇です。扶蘇は、『史記』によると一番かわいがっていたので、自分はこれから巡行の土地で亡くなるが、自分の遺体が咸陽に帰ったらおまえが埋葬しろと扶蘇に指名するんですね。これが遺言だと書いてあります。

ところがその後に、この遺言は竹簡ですから、たたき壊してなくしてしまうのが趙高と李斯と胡亥ですね。こういうことが最後に言われている。前漢の文帝の遺詔はきちんと残っていて、見ると面白い。何をお墓に入れるべきか、みんな指示しています。だからこのときにもし遺詔が残っていたとしたら、等身大の兵馬俑を造って埋めろと。等身大とは言わないでしょうが、入れろということを遺言として出した可能性はあるのではないかという推測です。

ここで私の話は終わりますが、そういうことで三点を挙げて、展覧会場でまた思い出して御覧いただければ、より面白く御覧になれるのかなと思います。最後、急ぎました。